花園大学文学部研究紀要　第54号　2022年３月　抜刷

# 言語形式
## ―認知の観点から―

Linguistic Forms: A Cognitive Perspective

有　吉　淳一郎

# 言語形式 ──認知の観点から──

Linguistic Forms: A Cognitive Perspective

有吉　淳一郎

## 1．はじめに

言葉の役割について考えてみる。すると、その最も中心的なものとして、コミュニケーションにおける伝達手段という点が挙げられるであろう。我々は世界について経験し、その事柄を言葉で表現し伝える。言葉は意味を担う。言葉と意味はどのように連関し、そして言語主体である人間は、これらに対しどのように関係づけられるであろうか。

人間は、その身体性を介した外部世界との相互作用を通じ、世界のあり方を認識し言語化する──本稿では、このような認知言語学のテーゼのもと、言語が外部世界に対する言語主体の認知プロセスを反映していることを例示、概観するとともに、種々の言語表現について、その文法性がこれら認知プロセスとの関連から説明されることを考察する。

## 2．言葉と意味

言葉は意味を伝える。では、言葉における意味とは、どのように捉えられるであろうか。テイラー・瀬戸(2008)は、これまでになされてきた意味研究を３つのアプローチに大別し検討している。次のとおりである。

(1) a. 言語と世界の関係を探るアプローチ: 意味は、言語表現と世界の状況の間の関係として研究される。

b. 言語内部に限るアプローチ: 意味は、言語表現と言語表現の間の関係として研究される。

c. 概念的アプローチ: 意味は、話し手の頭の中で概念化されたものに等しいと考える。　（テイラー・瀬戸 2008: 84）

まず１点目の「言語と世界の関係を探るアプローチ」であるが、これは意味を言葉と外部世界との関係から捉えようとするもので、意味に対する古典的アプローチとして位置づけられるであろう。このアプローチでは、ある表現の意味について、それが外部世界のどのような状況を指すのか、あるいは外部世界のある状況がどのように表現されるのか、といった点が問題となる。この考え方は、次の２つの方向性の可能性を示すこととなる。１つは、まず言語表現があり、そしてその指示物を外界に求めるというものである。もう１つは、まず外界にものがあり、そしてその表現を言葉の中に求めるというものである。いずれにせよ、意味を外界に求める、つまり意味は客観性に求められることとなる。例えば、ある言語表現とある言語表現との意味的な差異は、それぞれの外界における指示物の違いに求められることとなる。具体的に言えば、cupとmugの意味的な違いは、現実世界におけるそれぞれの指示物の違いに求められるわけである。意味とは、言語表現とそれが指し示す外部世界のものとの１対１の対応のもとに成立する――このように考えられることとなる。

次に２点目の「言語内部に限るアプローチ」であるが、これは、意味を語、句、文といった、純然たる表現同士の関係に基づき捉えようとするものである。同義関係、包摂関係、含意関係などがその考察の対象となる。例えば以下のペア

(2) a. The terrorists assassinated the President.
b. The President died. （テイラー・瀬戸 2008: 86）

では、(2a)が真であれば、(2b)は常に真である。大統領を暗殺したのであれば、同時に大統領が死んだことも成り立つ。(2a)は(2b)を含意する――両者の間に含意関係が成立するわけである。

さて、以上のアプローチについてであるが、テイラー・瀬戸は併せて欠点を指摘する。例えば１つ目の「言語と世界の関係を探るアプローチ」について言えば、指示物が具体的なものに限定される、つまり、例えばsoulやspiritといった抽象的なものについては、その指示物を外界に求めることは不可能である、という点

である。またこの他にも、仮に指示物が具体的な事物であったとしても、その意味の理解は当該事物との関連で完結するわけではない、という点も挙げられるであろう。

例えば以下において、それぞれの図は何を示しているだろうか。

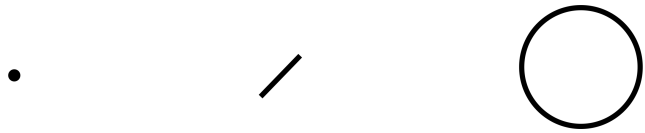

図1

おそらく、点、線分、円を示していると思われるのではないだろうか。しかしながらここで、wheel(車輪)の図をそれぞれの背景として添えてみると、どうであろうか。

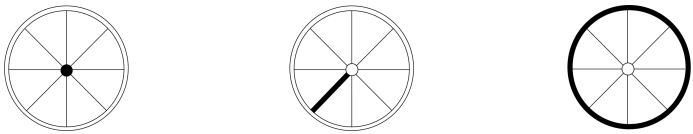


図2

点、線分、円と理解されていた事物が、今度は、hub、spoke、rimといった指示物として理解されるのではないだろうか。ここで、あるものの意味とは、それ単独では確定されえないことが分かる。hub、spoke、rimといった語の意味を理解するには、これらがその一部を構成しているwheelのイメージ全体を背景として念頭におく必要があり、このような背景知識が前提となって初めてそれぞれの意味が適切に捉えられるのである。指示対象単独ではなく、それを含む全体、その背景知識も意味理解に重要に関わっていることが明らかとなるのである(Langacker 2008: 87)。[1]

以上は、ある対象についての理解が、それを含む全体との関係性に基づいてな

されることを示すものであるが、このことは換言すれば、部分が全体から規定されることを意味することから、一般に広く観察されるゲシュタルトに関わる事象とパラレルに捉えることが可能であると思われる。例えば、雪だるまの顔を構成するパーツとして、仮に目に木炭が使われている場合、それが目としての意味合いをもつのは、その背景としての顔全体が認識され、その全体との関係において認識されるからである。雪が溶け、それを全体の中で位置づける背景として機能する存在が無くなってしまうと、目としての意味合いはもはや見出されなくなり、単なる木炭に過ぎなくなる。バケツを頭に乗せれば帽子の意味をもつが、雪が溶けてしまえば、そのもの自体は同じではあるが帽子としての意味合いはやはり消失してしまう。木炭やバケツといった個々の対象には、それ単独では目や帽子といった意味は見出されない。このような事例は何も視覚的な対象に限られない。聴覚的な対象にも認められる。例えば、ある歌のメロディーを転調して奏でたとする。メロディーが単にその構成要素である個々の音の総和であれば、転調後の構成音はすべて異なっているために同じメロディーとは認識されないはずである。しかしながら、実際には同じものとして認識される。これは、個々の構成音について、オリジナルとは異なっていても、メロディー全体の中での相対的な関係が同じであり、メロディーとしての全体的特徴が保持されているからである。メロディーは、その構成要素である個々の音の総和以上の全体的特徴を有しており、また各々の音は、それを含む全体としてのメロディーから規定されるのである。

さて、次の例も同様に、ある表現の意味について、それ単独では適切な理解がなされないことを示すものである。形容詞の事例である。

(3) a. バイクを良い値段で買う
　　 b. バイクを良い値段で売る

ともに、「良い値段」という共通の表現が用いられているが、その意味は異なる。(3a)では安価であることを意味するのに対して、(3b)では高価であることを意味する。ここでの「良い」の意味は、「買う」と「売る」のいずれの語と共起す

るかに応じて決定される。その意味はそれ単独では確定されないのである。

以上、意味についての適切な理解は、言語表現やその指示物のみではなく、他の要素と連関して、すなわち、生起する環境に依拠した形でなされることを見たが、ここで、そのような意味についての適切な理解とは、認知主体による事態の捉え方により動機づけられていることを確認しておきたい。先に図１、図２で見たように、hub、spoke、rimといった対象の意味の適切な理解は、それらをその構成要素の一部として有するwheelの背景知識が援用され、各々がそのような領域と関連づけられることによって初めて可能となるわけであるが、この一連のプロセスは言うまでもなく、認知主体による主観的な営みに他ならない。同様のことは(3)で見た「良い値段」のケースについてもあてはまる。「良い」は、「買う」と共起する場合には「安い」ことを、「売る」と共起する場合には「高い」ことを表すというように、同一の語であるにも関わらず、共起する語に応じてその意味が異なるわけであるが、これはまさに、概略、金銭を介しての所有物の譲渡という単一の出来事が、買うと売る、それぞれの立場によって違う形で捉えられていることの反映である。

意味に認知主体の事態に対する捉え方が重要に関わることは、名詞coastとshoreの対照を通じても明らかであろう。両語はともに以下の英英辞典の定義からも分かるように、日本語の「沿岸」「海岸」などにあたる、陸と海などの境界部分を表す語であり、意味的な違いはないように思われる。

(4) a. coast: an area of land beside a sea
　　b. shore: the land that is on the edge of a lake, river, or sea （MED[2]）

しかしながら、両語の意味は異なることが指摘される。もし意味が同じであるのなら、以下のペアに意味的な差異はないはずである。

(5) a. from coast to coast
　　b. from shore to shore

しかしながら実際には両者の意味は異なるのである。(5a)のfrom coast to coastは、辞書において成句扱いされることも多い慣用的な表現であるが、ではその意味は、(5b)のfrom shore to shoreとどのように異なるのであろうか。

この点に関し、coastとshoreは、上述のように陸と海の境界部分を表すという客観的なレベルにおいては共通しているが、その部分について、どちらの側の視点から捉えられているのか、といった点で異なっており、coastは陸の方から、shoreは海の方から捉えた場合の語であるとされる。そこで、上記(5a)と(5b)の違いについてであるが、from coast to coastであれば、例えばアメリカ大陸の東海岸から西海岸までといったような大陸横断を表す表現であるのに対し、from shore to shoreは、例えば航路による日本からアメリカへの太平洋横断を表すような表現なのである(本多2013: 8)。なおこれに関連し、沿岸警備隊のことをcoast guardというが、これも侵入者の上陸を阻む陸地側からの視点が反映された結果の表現と言えるであろう。これらはいずれも、認知主体による事態の捉え方が意味のあり方に決定的に関わっていることを示す好例であると思われる。[2]

以上、(1a)の「言語と世界の関係を探るアプローチ」を引き合いに、意味についての適切な理解は、言語主体による事態の捉え方といった観点なくしては不可能であることを概観したが、このことは(1b)の「言語内部に限るアプローチ」についても同様である。このアプローチでは、意味とは言語表現と言語表現の間の関係として研究されるものであり、よってその分析には、言語主体の事物・事態などに対する捉え方といった観点は相容れない。言葉の実際のあり方を説明できるものではないことには変わりはないのである。

とはいえ、である。それでも、例えばネコという言語表現が意味するところを考えてみると、ニャーニャーと甘えてくるあの動物のことである、すなわち、ネコという言葉の意味は外界に存在している、また、ワンワンと吠え鼻をクンクンとさせる動物が存在し、それはイヌという表現に対応する――意味とはやはり、言語表現と外部世界におけるその指示物との1対1の対応のもとに成立するものとして位置づけられるのではないか、といった声が聞かれるかもしれない。だとすれば――すなわち、もしも言語表現とその指示物との関係性のみに意味が依拠

するのであれば――事物に対する意味づけは、用いられる実際の語彙に違いはあるにせよ、異なる言語間において同じようになされるはずであることが示唆されることとなる。しかしながら、世界のあり方は実際にはそのようにはなっていない。

日本語では「蝶」と「蛾」は明確に区別されるが、両者はフランス語ではpapillon（パピヨン）という１語で表されることが知られる。なんとも日本語話者からすると驚きを禁じえないが、鈴木（1990）は、百科事典を開きpapillonの項目を見た際、色刷りのページいっぱいに、蝶と蛾が混ざり合って掲載されているのを目にした驚きについて語っている。papillonという１つの見出しのもとに両者が混在しているのは、フランス語話者にとってはごく当然なわけであるが、それを見た際にさぞかし驚いたであろうことは察するに難くない。翻って日本語ではどうであろう。蝶といえば、きれいで胴体が比較的細く、ひらひらとお花畑を舞っており、一方、蛾といえば、汚くて胴体はずんぐりとしており、何か不気味である――一般的にこのようなイメージで捉えられているのではないだろうか。蝶については、人によってはモンシロチョウやアゲハチョウなどを網で捕まえて虫かごに入れた、そんな経験もあるだろう。しかしながら蛾についてはそのような経験のある人はまずいないであろう。日本語とフランス語とでは、対象に対する意味づけのあり方が異なるのである。[3]

言語間において、言語表現とその指示物との間にギャップがあるケースは広く観察される。例えば日本語の「指」と英語のfingerである。片手について、日本語では親指、人差し指、中指、といった具合に５本の指があるわけであるが、英語では４本のfingerと、１本のthumb――日本語での「親指」――である。日本語では手のひらから放射線状に伸びた部分をすべて「指」と呼ぶのに対し、英語ではそうではなく「親指」にあたる部分を他の４本と区別して呼ぶわけであるが、この理由は、人差し指から小指までの他の指との相対的な位置関係および外見的な特徴、ならびに他の指と組み合わせて対となり使用されるといった機能的な特徴に基づくものであろう。

上記はいずれも、具体的な形状を有するものの事例であったが、そのような具

体的な形状を有さない事例もある。例えば虹の色数について、通例日本語話者であれば何の疑いもなく７色と考えるのではないだろうか。しかしながら、異なる言語においてはその数が異なることが知られる。日本語では通例７色とされている虹の色であるが、これはショナ語では３色であり、バサ語ではなんと２色であるとのことである(鈴木 1990)。虹は、空気中に浮遊する微細な水滴が太陽光をプリズムのごとく反射させることによって見える現象である。その際、波長によって光の屈折率が異なることにより、赤、黄、緑、紫など、さまざまな色に見えるわけであるが、本来的には、虹の各色は緩やかなグラデーションを形成しており、切れ目のない連続体である。このような連続体をなす虹の色について、言語間において見出される数が異なるということは、すなわち、言語同士で色と色の境界線の引き方が異なるということを意味しており、このような事実もまた、まさに認知主体である人間がその主観的な営みにより外部世界を捉え、そして意味づけを行っているということを強力に支持するであろう。[4]

以上、意味について、言語表現と外部世界との関係性、ならびに言語表現と言語表現との関係性から捉えようとするアプローチでは、その適切な理解は不可能であることを概観した。意味については、対象の特性によって客観的に規定される部分がある一方で、言語主体である人間の認識および解釈といった主観性が大きく関係していると考えられることは明白であろう。これがまさに、冒頭の(1)で３つ目として挙げられている「概念的アプローチ」のスタンスであり、認知言語学における意味に対する考え方の根幹をなすものである。ここで意味について、概略、以下のように示すことができるであろう。

(6)　意味=対象+言語主体による捉え方

認知言語学では、言語主体は外界に対し、自身の身体性を通じた相互作用によって、積極的に意味づけを行っている、と考える。我々の眼前に立ち現れてくる世界のあり方は、客観的に存在する世界のあり方そのものではないのである。このことは、視覚や聴覚などを司る感覚器の能力に見られるように、人間の身体性に

一定の制約が課せられている点からも明らかであろう。そしてまた、外界についての経験の言語化についても、人間は対象をただコピーするかのごとく、その客観的特性のみに基づいて言葉を表出しているわけではない。焦点の当て方や細密度の設定など、主体によるその捉え方によりさまざまな描写の様態があり得る。言葉とは、いわば人間というフィルターを通じ創造される、外界についての再構築物であり、そこには認知主体による外界に対する捉え方が映し出されているのである。

以上、我々が認識する世界ならびにその表現形式のあり方は身体性に依拠しており、言語表現には、認知主体としての人間の認知能力が反映されている――このように考えられるわけであるが、言語表現の表出および言葉のあり方において、人間に備わる認知能力はどのように特徴づけられるであろうか。次節では、種々の言語現象を通じ概観するとともに、言語形式における文法性について、認知主体の認知プロセスの観点から説明されることを論じる。

## 3．認知プロセスの反映としての言語形式

言語表現は、主体が外部世界を解釈していく認知プロセスの反映として規定され、外部世界に対する解釈は主体の視点との関連で意味づけがなされる――山梨(2004: 3)はこのような考えに基づき、認知主体の基本的認知プロセスとして以下を挙げる。

(7) 基本的認知プロセス
焦点化、図・地の分化、図と地の反転、スキャニング、イメージ形成、イメージ・スキーマ形成、スキーマ変換、メタファー変換、メトニミー変換、プロファイル・シフト、スーパー・インポジション、等
(山梨 2004: 4)

そして、言葉のさまざまな側面について、これらの基本的認知プロセスの発現の結果として理解される、とした上で、従来の、言語的知識の自律性を前提とする

研究――例えば生成文法――では、その文法性についての説明が不可能である言語現象に対し、これら認知プロセスの観点から説明が可能となることを示している。以下では、それらのうち、図・地の分化、図と地の反転、スキャニングに関連するものをピックアップし、具体例を交え考察を進めていく。

まずは以下をご覧いただきたい。スキャニングに関するものである。

(8) a. 山脈が東から西に走っている。
　　b. 山脈が西から東に走っている。
(9) a. 突堤が海に突き出ている。
　　b. 半島が東に延びている。
　　c. 山が海に迫っている。　　(山梨 2004: 6)

これらの例は通例、比喩として理解されるであろう。(8)について言えば、主語は無生物の「山脈」であり、述語は主語に「有生物」といった意味素性をもつ項を取る動詞である「走る」である。そこで文字どおりには、山脈が走る、となることから、それぞれの要素の意味的な制限から考えると、本来であれば容認されないはずである。しかしながら、これらの文が容認されるのは、まさに比喩として解釈されることに求められるであろう。この点、(9)も同様である。突堤が突き出たり、半島が延びたり、山が迫ったりはしない。これらが容認されるのも、比喩的に解釈されるがゆえであると考えられるであろう。

以上、(8)(9)は本来的には主語・述語間の選択制限に違反した例であるわけであるが、同様のことは次例にも当てはまるであろう。

(10) a. 海が微笑んでいる。
　　b. ススキが手招きしている。　　(山梨 2004: 7)

山脈が走らず、また半島が延びたりしないのと同様、海も微笑んだりしないし、ススキも手招きをしたりはしない。そこで、(8)(9)そして(10)はすべて比喩とし

て、特に擬人化表現の例として捉えられるように思われる。しかしながら山梨は、(8)(9)と(10)について、その文法的振る舞いが異なることを指摘する。

(11) a. 海が嬉しそうに微笑んでいる。
b. ススキがやさしく手招きしている。 (山梨 2004: 7)

(10)の用例に対しては(11)のように、「嬉しそうに」や「やさしく」といった、人間の内面・心理的側面を叙述する表現が共起可能であるが、(8)(9)の用例に対してはそのような共起は許されない。

(12) a. *山脈が嬉しそうに東から西に走っている。
b. *山脈が一生懸命に西から東に走っている。
(13) a. *突堤がためらいながら海に突き出ている。
b. *半島が東にひたむきに延びている。
c. *山が海にやさしく迫っている。 (山梨 2004: 8)

(8)(9)および(10)の用例、すなわち「山脈が東から西に走っている」「突堤が海に突き出ている」「海が微笑んでいる」などが、動詞が本来要求する意味素性を有する項が主語に生起していないにもかかわらず容認されるのは、主語が擬人的に解釈されるからである――一見このように思われるわけであるが、「嬉しそうに」や「やさしく」といった修飾要素の共起についての容認度が異なることから、これらを一律に比喩、擬人化表現として捉えることが適切ではないことが示唆されることとなる。では、(11)と(12)(13)に見られる容認性の違いは、いかに説明されるであろうか。

山梨(2004: 8)は、(8)および(9)の用例は擬人化表現ではなく、言語主体が外部世界を知覚する際の視線の移動(スキャニング)が反映された言語表現であるとする。(8)では、主語である山脈が実際に東から西へ、また西から東へと走るわけではないわけであるが、この場合、山脈を見ている認知主体の視線が東から西へ、

また西から東へと移動をしており、このような認知主体による視線の動きが「走っている」という述部の部分に反映されているのである。この点は(9)についても基本的に同様である。(9a)では突堤、(9b)では半島、(9c)では山と、それぞれの対象に対する認知主体の視線の移動が関わっている。例えば(9a)では突堤を視野に捉え、その姿を海の方へと目で追っていく際の視線の移動を述部の「突き出ている」は反映しているのである。生成文法では、意味素性および選択制限に基づき文の容認性が規定されるため、(11)(12)(13)の事例において、「嬉しそうに」や「やさしく」といった修飾語句の共起可能性について正しく予測することは不可能であろう。これに対し、認知言語学のアプローチでは、認知主体の視線の移動・スキャニングといった、人間が有する認知能力の観点から説明することが可能となるのである。

さて、次に移る。以下では、基礎的認知プロセスのうち、図と地の分化・反転の観点から言語表現を考察するが、ここで図と地の概念について簡単に触れておく。我々は外界を視覚で捉える際、その対象のすべてを同じように認識はしていない。例えば部屋の窓から外に目を向けると、海が見え船が浮かんでいるとする。このような場合、船は際立って認識され前景として捉えられ、海はその背景として捉えられるであろう。心理学において、このように、焦点が当たり前景として捉えられる部分は図、対して、その背景として捉えられる部分は地と呼ばれる。一般に、まとまりのあるものは図として、そして広がりのあるものは地として知覚される傾向があることが知られる。

このように、外界に対する我々の視覚には基本的に不均衡さが認められるわけであるが、常に不均衡であるというわけではない。同じ視覚刺激であっても、視点の投影の仕方によって、図と地が入れ替わって認識されることがある。一例を示す。

図３

これは有名な「ルビンの盃」と呼ばれる図形である。この図形は、白い部分に焦点を当てると盃として、黒い部分に焦点を当てると向かい合った２人の横顔として知覚される。前者では黒い部分が背景として、そして後者では白い部分が背景として知覚されているわけである。このように視点の投影の仕方によって、同一の図形であるにもかかわらず、図の部分と地の部分が交互に入れ替わって見える。「図と地の反転」として知られる現象である。

以上が図と地の分化・反転についての概略であるが、この認知プロセスとの関連から、言語表現の文法性はいかに説明されるであろうか。以下をご覧いただきたい。

(14) a. キャンプ場が近づいて来た。
　　 b. 岸壁が迫って来る。
(15) a. キャンプ場に近づいて行く。
　　 b. 岸壁に迫って行く。　　（山梨 2004: 11）

(14)は本来的には主語と述語の間に選択制限上の違反が認められるケースである。キャンプ場は近づいてこないし、また、岸壁も迫ってはこない。これはまさに前掲の(8)や(9)と同じ図式である。これらの用例もまた、一見すると主語名詞が擬人化された比喩表現のように見えるが、しかしながら「急いで」や「慌ただしく」といった修飾語句は付加されない。

(16) a. *キャンプ場が急いで/忙しそうに近づいて来た。

b. *岸壁が慌ただしく/ためらいながら迫って来る。 (山梨 2004: 13)

これらの非文法性により、(14)はまさに前掲の(8)(9)と同じタイプの事例のように思われる。しかしながら山梨は、両者――例えば「山脈が東から西に走っている」のタイプと「キャンプ場が近づいて来た」のタイプ――は異なっている、とする。先述のスキャニングの例では、言語主体から対象に対して投げかけられる視線の移動が問題となっており、主体によるこの視線の移動がまさに述部の表現に反映されていたわけであるが、(14)ではこのような主体の視線の動きだけではなく、主体自身の動きが関連している、と論じる。(14a)では、認知主体が、対象であるキャンプ場へと移動をしている。そしてこの移動と呼応して、キャンプ場が認知主体の方へと近づいてきているように捉えられている。すなわち、このようにキャンプ場が主体の方へと移動してきているように見えるのは、主体自身の主観的な認識であり、この文ではこのような主体自身による「見え」がそのまま述部の表現に反映されているわけである。以上は基本的に(14b)についても同様である。また(15)についてであるが、ここでも主体の方が、対象であるキャンプ場もしくは岸壁の方へと移動をしており、その際に認識される見えが述部の表現に反映されている。ただしこれらの場合は、述部が(14)のそれとは異なり、「近づいて行く」「迫って行く」となっている。

さて、これらの表現の文法性について、図と地の分化・反転の認知プロセスの観点からどのように説明されるか、であるが、山梨は、認知主体による外部世界の知覚について、「状況レベル」と「知覚レベル」の２つのレベルを想定する。状況レベルは物理的な移動に対応し、知覚レベルは主観的な移動に対応するものである。そして、この状況レベルと知覚レベルが図と地に分化し、さらに両者の間には反転が見られると言う。下記の図は、それぞれのレベルにおける物理的な移動と主観的な移動の相対的な関係を示したものである。[5]

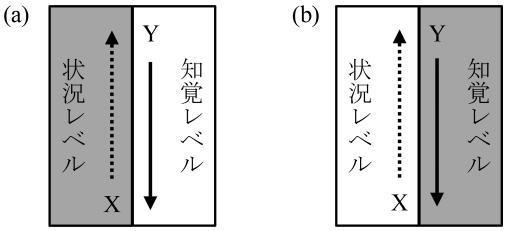


図４

Xは認知主体、Yは知覚対象を表している。客観的な状況における主体の移動は破線の矢印、主体が知覚する主観的な移動は実線の矢印で表されている。そして背景化され地となっている部分は網掛け、前景化され図となっている部分は白抜きで表されている。我々が認知主体として外部世界を移動し、そこにある対象を知覚する際には、状況レベルと知覚レベルが図と地に分化し、さらに両者の間に反転が認められるが、この図は、この図と地の反転の関係を示しており、(a)は上記(14)の、(b)は(15)の用例の認知プロセスにそれぞれ対応するものである。(14)は「キャンプ場が近づいて来た」のパターンの文であるが、ここでは状況レベルと知覚レベルのうち、知覚レベルの方が前景化され図となり、状況レベルの方が背景化され地となっている。一方、「キャンプ場に近づいて行く」のパターンである(15)では、状況レベルの方が前景化され図となり、知覚レベルの方が背景化され地となっている。(14)(15)は従来の、擬人化による比喩表現としては適切に捉えることができないが、このように、人間の有する基本的認知プロセスである図と地の分化・反転といった観点に基づき、自然な形でその文法性について説明また予測することが可能となるのである。

以上、図と地の分化・反転の観点から、言語表現の文法性について考察したが、この図と地の分化・反転の観点に基づき、引き続き別の言語現象を取り上げてみたい。以下をご覧いただきたい。

(17) a. The box contains an orange.
b. An orange is in the box.

(18) a. The bottle contains milk.

b. Milk is in the bottle. (山梨 2004: 149)

これらではともに、ある事物とそれが存在している場所との関係が描写されており、(a)(b)のペアは真理条件的には同一の状況を表している。例えば(17)について言えば、箱がその中にオレンジを有しているということが成立する場合には、オレンジが箱の中にあるということも同時に成立する。逆に、オレンジが箱の中にあるということが成立する場合には、箱がその中にオレンジを有しているということも同時に成立する。この点、(18)についても同様である。

以上、(17)(18)のペアは、それぞれ客観的には同一の状況を描写していると思われるわけであるが、では両者の意味は同じであると考えてよいのであろうか。形式が異なれば意味は異なる――この言語観に基づけば、両者の意味は異なるはずである。ではどのように異なるのであろうか。山梨(2004: 149)は、セッティングと参与者における図と地の反転の観点から説明をする。セッティングとは場所や状況として、対して、参与者とはその中に位置づけられる存在として理解されるものである。山梨は、(17)(18)それぞれのペアにおけるセッティングと参与者の反転の関係を以下のように図示する。[6]

図5

この図において、太線部分は図として前景化され、細線部分は地として背景化されていることを示す。(a)(b)はそれぞれ(17)(18)の(a)(b)に対応、またtrは主語、lmは目的語に対応している。ここで(17)を例に取ると、(a)はセッティングである主語the boxが図として前景化され、参与者である目的語an orangeが地として背景化された表現であると理解される。これとは逆に、(b)はセッティングであるthe boxが地として背景化され、参与者であるan orangeが図として前景化され

た表現であると理解される。すなわち(17)の(a)(b)はそれぞれ、セッティングと参与者における、図と地の反転の認知プロセスの反映として捉えられる、換言すれば、両文の形式上の違いは、認知主体による事態把握のあり方の違いに求められるのである。

さて、英語では、(17)(18)のペアに示されているように、参与者とセッティングの反転が可能であるわけであるが、下記のとおり、これに対応する日本語の場合はその反転に制約があり、セッティングの要素は主語として生起しにくいように見える。

(19) a. ?*この箱はミカンを含んでいる。
b. ミカンがこの箱に入っている。
(20) a. ?*このボトルはミルクを含んでいる。
b. ミルクがこのボトルに入っている。 (山梨 2004: 149)

このように、参与者が主語である場合は問題なく容認されるのに対し、セッティングが主語である場合には容認性が著しく下がることから、一見すると日本語では英語のcontain、またhaveといった動詞を用いた所有構文は許容されないように思われる。しかしながら山梨は、このような一般化に異を唱え、日本語ではむしろ、英語の所有構文に対応する表現の方が適切であるとみなされる事例があることを指摘する。

(21) a. この果物はダイオキシンを含んでいる。
b. ?この果物にはダイオキシンがある。
(22) a. この脱脂綿は水を含んでいる。
b. ?この脱脂綿には水がある。 (山梨 2004: 150)

(19)(20)、および(21)(22)は、ある事物がある事物をその中に含んでいるという状況を表しており、包含関係において両者は同一であるように思われる。しかし

ながら山梨は、両者の包含関係は厳密には異なると言う。すなわち、(21)(22)の類では、入れ物とそこに存在する事物の間に緊密な包含関係が成り立っており、両者は安易に出し入れが可能な関係ではなく、入れ物の中にある事物は、そこに分離不可能な状態で分散的に存在している、とする。この関係は、図６のように示される。[7]

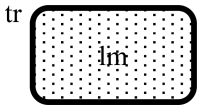


図６

日本語ではこの図に示されているような、緊密で分離不可能な包含関係が成り立つ場合に、(21)(22)の(a)の形式の表現が可能となるのである。参与者とセッティングの要素の反転には、存在モード上の制約が働いており、これらのペアの容認性の違いは、このモードにおける緊密性、分離可能性といった意味特性の差異に起因しているものと理解されるのである。

さて、図と地の分化・反転の観点に基づくと、動詞spray、pour、fillの統語的振る舞いについても説明が可能となる。以下をご覧いただきたい。

(23) a. Bill sprayed the wall with paint.
b. Bill sprayed paint on the wall.
(24) a. *Bill poured the glass with water.
b. Bill poured water into the glass.
(25) a. Bill filled the glass with water.
b. *Bill filled water into the glass.

これらの動詞はいずれも、ある行為によって生ずる、ある場所への物体の移動を表している点において共通の意味を有している。しかしながら広く知られているように、各々の統語的振る舞いは異なる。(23)から(25)の対比に示されているよ

うに、sprayが場所を直接目的語とし移動物を前置詞で表すパタンと、移動物を直接目的語とし場所を前置詞で表すパタンの両方を許すのに対し、pourは移動物を直接目的語とするパタン、そしてfillは場所を直接目的語とするパタンしか許さない。pourとfillにおいてはそれぞれ、場所を直接目的語とするパタン、移動物を直接目的語とするパタンは許されないのである。

さて、上述のとおり、spray、pour、fillはいずれも、場所、移動物といった要素を従え、物体の場所への移動を表しているという点において意味的に共通しているものの、個々の要素の具現のされ方が異なるわけであるが、このような統語パタンの違いはいかに説明されるであろうか。この点に関し、影山(2001)では、動詞が表す意味を構成する要素のうち、そのどの部分が重点を置いて表現されるのかといった、動詞の意味構造における「焦点化」の観点から説明がなされている。

例えば、ある行為によって移動物の動きが生じ、そしてその移動物の動きによって場所の結果状態がもたらされるという意味的連鎖を考えた場合、pourであれば、その意味として重要なのは、注がれるものの落ち方である。(24b)を例に言えば、この文によって示されているのは、水が切れ目なく１つの連続体として落ちていく様子である。もし落ちていく際の水の形状が、ポトポトと滴になっているのであれば、それはpourではなくdripが用いられるべき事象である。以上から、pourは事物の「動き」に重点を置いた意味合いを有する動詞であると位置づけられるであろう。このようなpourに対し、fillは対照的に捉えられる。すなわちfillについては、事物の移動のあり方は問題ではなく、事物の移動先である場所が、事物が移動した結果どのようになるのかといった、場所の「結果状態」に意味的な重点が置かれるのである。(25b)で言えば、水の移動によって当該のグラスが満たされるという状況がもたらされる点が重要であり、水がどのようにしてグラスへと移動していくのかといった、事物の動きそのものは問題とはならない。ボトルから注いで満たそうが、スポイトで一滴ずつ垂らしていき満たそうが、そこは不問なのである。

以上より、pourはその意味構造において、移動物の動きの部分に着目するた

めにpour A into Bの形式を取り、fillは場所の結果状態の部分に着目するためにfill B with Aの形式を取る――このように考えられるわけであるが、このことに基づくと、(23)に見られる交替を許す動詞は、その意味構造において、移動物の動きと場所の結果状態の双方に対して着目が可能なものであろうと推測されることとなる。

ここで、各動詞の表す意味内容を構成する要素のうち、そのどの部分に重点が置かれるのかについて、以下のようにまとめられる。[8]

(26)

| | <行為> → | <移動物の動き> → | <場所の結果状態> |
|---|---|---|---|
| pour型 | | XXX | |
| fill型 | | | XXX |
| 交替型 | | XXX | XXX |

(影山 2001: 111)

交替を許す動詞は、移動物の動きの意味と、移動物の動きによってもたらされる場所の状態変化の意味という、両方の意味を備えている必要があることが示されているわけであるが、これは同時に、交替を許す動詞は、それが許す形式のどちらを取るのかによって、表す意味内容が異なる、ということを示唆することとなる。sprayであれば、例えばペンキが単に壁に対して吹き付けられたという事物の移動に焦点が当てられた解釈と、ペンキが壁に吹き付けられ、その一面を覆ったという場所の状態変化に焦点が当てられた解釈とがあるが、これらの解釈はそれぞれ、spray paint on the wallとspray the wall with paintに対応するものである。[9]

これら両者の意味的な違いは、動詞が有する意味構造のどの部分が図として捉えられ、そしてどの部分が地として捉えられるのかといった、図と地の分化・反転の観点から説明されるであろう。移動物の動きが着目され焦点化される場合には、その部分が前景化され図として捉えられ、場所の結果状態の方が背景化され地として捉えられる。このような場合には、pour型、すなわちspray paint on

the wallの形式となる。逆に、場所の結果状態が着目され焦点化される場合には、その部分が前景化され図として捉えられ、移動物の動きの方が背景化され地として捉えられる。このような場合には、fill型、すなわちspray the wall with paintの形式となるのである。

ここで、(24a)*Bill poured the glass with water.と(25b)*Bill filled water into the glass.の非文法性についても、同様の観点から説明される。これらの文は一見するとそれぞれ、「ビルはグラスに水を注いだ」「ビルはグラスに水を満たした」といった日本語に対応するように思われ、ゆえに、非文法的であるとされることに対しては不可解であるように思われるわけであるが、前者については、動詞pourが移動物の動きの部分に着目する動詞であるにもかかわらず、場所の結果状態に着目する際に用いられる統語形式を取っており、対して、後者については、動詞fillが場所の結果状態に着目する動詞であるにもかかわらず、移動物の動きの部分に着目する際に用いられる統語形式を取っていることに帰されるのである。

以上、動詞の交替現象をめぐる文法性について、動詞が表す意味内容を構成する要素における図と地の分化・反転の観点から説明が可能となることを見た。

## 4．おわりに

言葉には我々人間の外界に対する捉え方が反映されている――本稿では、認知言語学のアプローチに基づき、人間が有する一般的認知能力のうち、特にスキャニング、図・地の分化およびその反転に関わる認知プロセスの観点から、比喩的表現、所有と存在に関わる表現、動詞の交替現象を例に、その文法性がいかに説明されるかを概観した。文法性とは、ともすれば無機的に捉えられるきらいがあるが、言葉とは人間の認知能力を基盤とした構築物であり、文法性をはじめとする言語の諸相は、人間の有する認知プロセスと密接に結びついているがゆえに、言語の解明は人間の認知メカニズムの解明に他ならないのである。

## 注

1. 図１、図２はLangacker(2008)に基づく。
2. 認知主体によって産出される言語形式を通じて表される意味は、多分にその主観性を帯びているわけである。主観性が最も極端な形で発現している例として、「太陽が昇った」や「駅が近づいてきた」の類を挙げることができるであろう。これらはごく自然な表現であるが、よくよく考えてみると、実際には太陽は昇らないし、また駅も近づいてはこないことから、客観的事実に照らし合わせた場合、これらの文は事実に反する内容を述べているわけであるが、認知主体としての人間は当該事象を自身の「見え」として、そのように捉えており、このような見えが言語表現に反映されているのである。
3. ちなみに、蝶と蛾が区別して認識される点においては、日本語と英語は共通している。「蝶々夫人」(Madame Butterfly)で蛾(moss)はイメージされないであろう。
4. 色に関連して、ロシア語やギリシャ語には「青」という単独の語は存在せず、「薄い青」と「濃い青」とに分かれるとのことである(今井 2010)。日本語でも「紺」という語彙があるものの、より一般的には「青」が用いられるのではないだろうか。我々はそこに「青色」があることに何の疑問も抱かないだけに、大変興味深い。
5. 図４は山梨(2004: 12)に基づく。
6. 図５は山梨(2004: 149)に基づく。
7. 図６は山梨(2004: 151)に基づく。なお、点在する細かな点は、事物の分散的な存在のモードを示している。
8. (26)において、XXXは意味的に重視される部分を表す。
9. このような意味的な差異については、英和辞典の記述にも確認することができる。例えばsprayについてはG[5]を参照のこと。

## 参考文献

本多啓. 2013.『知覚と行為の認知言語学』東京: 開拓社.
今井むつみ. 2010.『ことばと思考』東京: 岩波書店.

影山太郎(編). 2001.『日英対照 動詞の意味と構文』東京: 大修館書店.
Langacker, R. W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.（山梨正明(監訳) 2011.『認知文法論序説』, 研究社.）
鈴木孝夫. 1990.『日本語と外国語』東京: 岩波書店.
テイラー, ジョン・R, 瀬戸賢一. 2008.『認知文法のエッセンス』東京: 大修館書店.
山梨正明. 2004.『ことばの認知空間』東京: 開拓社.

## 辞書

『ジーニアス英和辞典』第５版. 2014. 東京: 大修館書店. [$G^5$]
*Macmillan English Dictionary for Advanced Learners*. 2nd. 2007. Oxford: Macmillan Education. [$MED^2$]